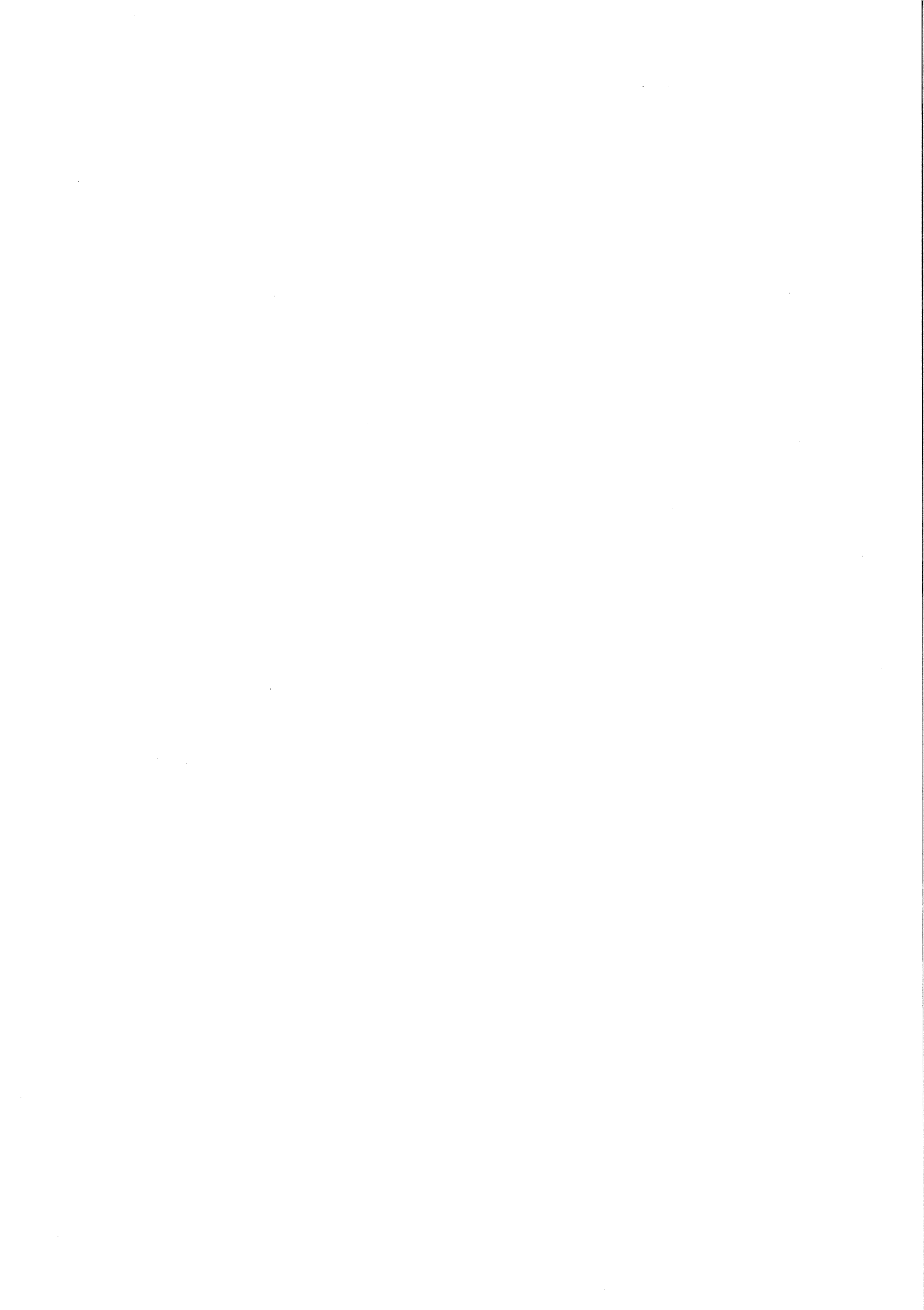




1. 発掘区全景（南から）

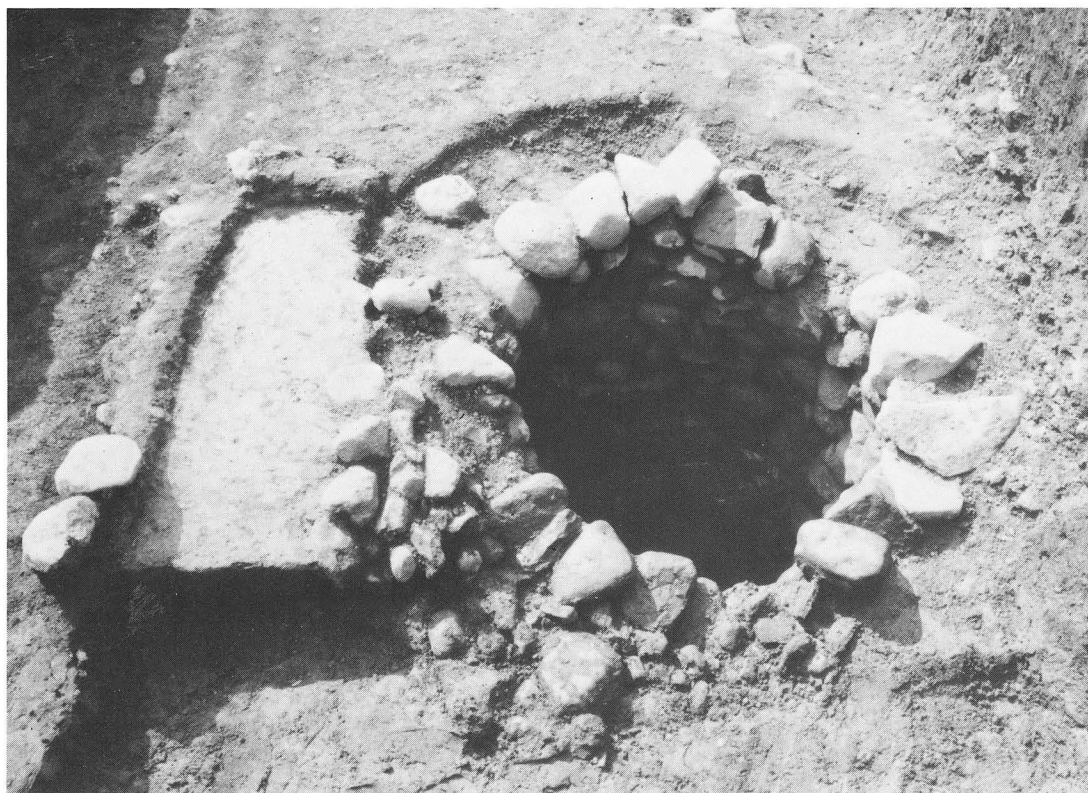


1. 発掘区全景（南から）





2. 発掘区全景（北から）



3. 井戸SE01、土壙SK03（北から）



平城京のその他の調査

例 言

1. 本書は、奈良市教育委員会が平城京内4箇所において行った発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は昭和56年度に実施したものであり、各々の調査期間は本文中に記した。なお、八条町281番地の調査を除く他の3箇所の調査は国庫補助金を受け実施した。
1. 発掘調査は奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、現地の担当者は目次に明らかにした。
なお調査補助員として奈良大学、花園大学学生諸氏の参加があった。
1. 発掘調査にあたっては各々土地所有者の御協力を得た。記して感謝する。
1. 本書の作成は調査担当者が分担して行い、文責は目次に記した。全体の編集は担当者全員の討議をもとに西崎卓哉が行った。

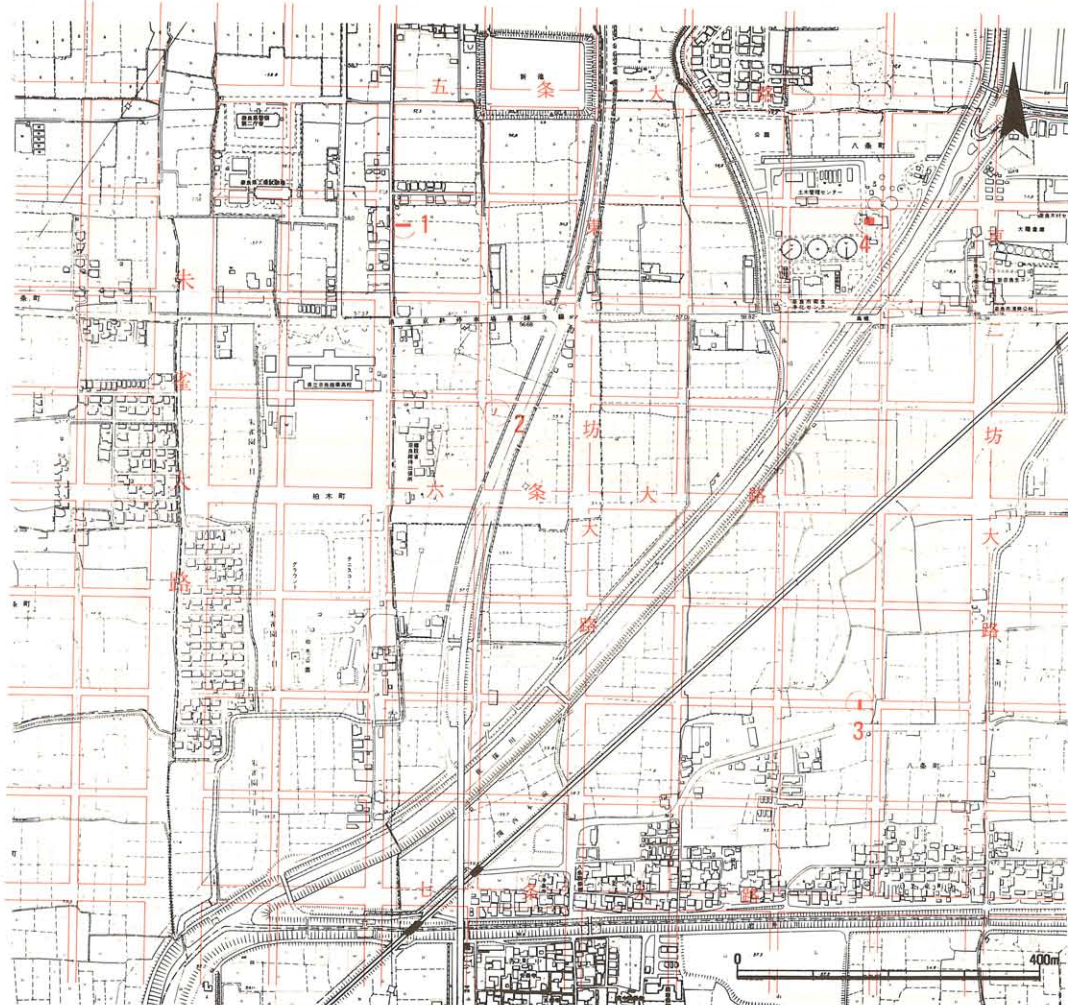
目 次

I はじめに	(西崎卓哉)	201
II 平城京左京六条一坊十坪の調査	(西崎卓哉)	202
III 平城京左京六条一坊十三坪の調査	(森下恵介)	204
IV 平城京左京七条二坊十・十一坪の調査	(中井 公)	205
V 平城京左京六条二坊十坪の調査	(西崎卓哉)	206

I はじめに

近年、市内の盛んな開発が続くなか奈良市教育委員会では昭和56年度30箇所^注の発掘調査を実施した。ここでは調査地が比較的近接し、また調査面積も小範囲である4箇所^注の調査をとりまとめて報告する。各調査地は、平城京の条坊では大きく東西を朱雀大路と東二坊大路に、南北を五条大路と七条大路によって限られる地域の中にある。この地域の調査例として、平城京朱雀大路の調査がある。この調査では朱雀大路の東西両側溝を検出し、その後の京条坊復原にとって大きな意味を持つ調査となっている。今回の4箇所^注の調査も主に条坊の確認を目的としたものである。

注) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』(1974)



第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1 / 10000)

II 平城京左京六条一坊十坪の調査

1. 調査の契機と経過

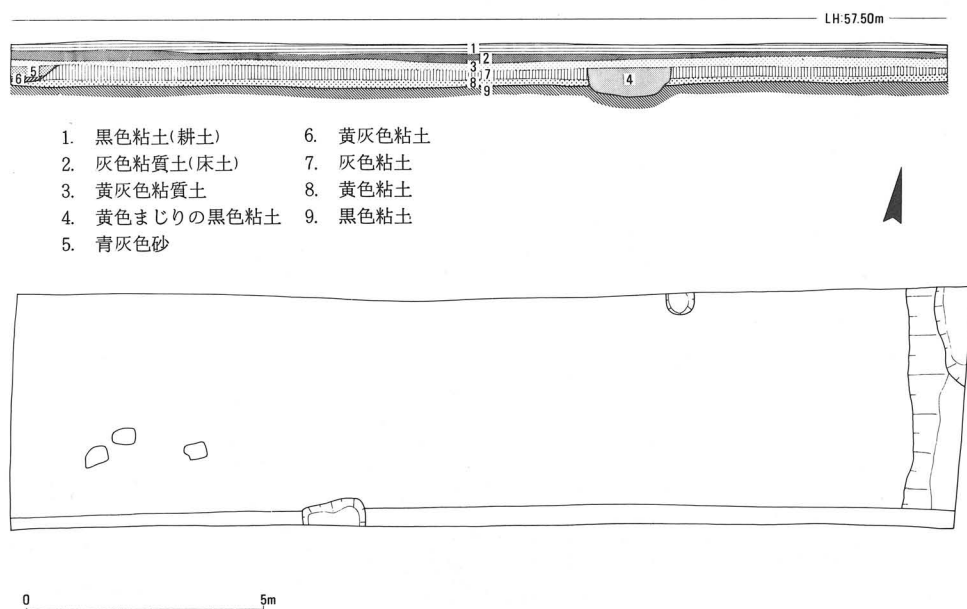
昭和56年12月2日、奈良市柏木町494の2～5番地において住宅及び農業用倉庫新設計画がある旨の届けが、奈良市柏木町61の1番地在住の福井三良氏より奈良市教育委員会に提出された。届出地は、平城京の条坊復元では左京六条一坊十坪とその西を限る坊間路に相当する地域である。そのため遺跡の重要性に鑑み奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会による協議を行った結果、奈良県教育委員会文化財保存課の行政指導を受け奈良市教育委員会文化財課が現地での発掘調査を担当、実施することとなった。

調査は昭和57年2月24日に重機械を使用して表土を除去することから開始し、同年3月10日に現地での日程を終了した。発掘区は東一坊々間路の確認と十坪内の様相を知ることを目的に東西20m南北5m(100㎡)の規模で設定した。

2. 調査の内容

検出遺構 以下、土層堆積状態について述べた後、検出した各遺構について記す。

第1層黒色粘土は現在の水田耕作土、第2層灰色粘質土はその床土である。第3層黄灰色粘質土は弥生時代から中世までのものと思われる若干の遺物を包含している。各時代の遺物が混入していることから、付近の水田化のおりの整地層かとも考えられる。第7層灰色粘土上面で遺構を検出し



第 2 図 発掘区南壁堆積土層・検出遺構平面図 (1 / 160)

た、以下黄色粘土、黒色粘土と続き地山である黄褐色粘質土に達する。堆積状態の観察から付近が何回かにわたり滞水したことがわかる。これは、調査地周辺が大和盆地でも春日野台地からの緩やかな下り勾配が西の京丘陵に向っての緩やかな上り勾配に変換しようとする地帯であるため、標高が低く河川の氾濫原となるためであろう。

今回の調査で検出した遺構は土壇、落ち込みなどである。SK01 は一辺約0.7mの隅丸方形の掘方を持つ土壇。深さ約0.5mである。南半部が発掘区外へのびるため全体の規模は明らかではない。内部から瓦器椀かと思われる小片を含む若干の土器片が出土した。SK01 は、発掘区東端で検出した深さ約0.2mの落ち込み。発掘区外へ続いたため全体の規模は不明。内部から少量の瓦片、土器片が出土したが、その時期を決するまでには致らない。他に径0.3m、深さ0.2m程度のピットを4基検出したが、その性格は不明である。

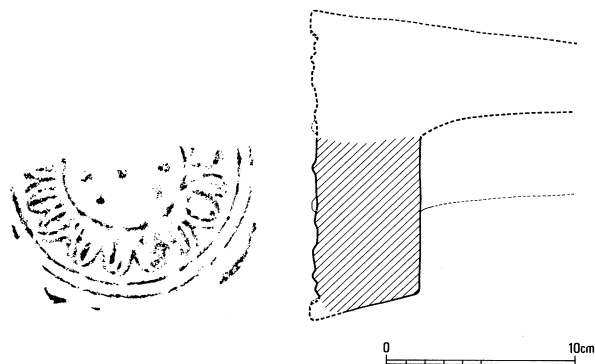
これらの遺構は平城京の条坊に直接関るものではなく、当初目的とした東一坊々間路を確認することはできなかった。発掘区が小範囲であるため結論を急ぐことは避けなければならないが、今回の調査からみれば東一坊々間路は発掘区外に存在する可能性が高い。

出土遺物 遺物包含層および遺構中から若干の瓦、土師器、須恵器などが出土した。以下、図示できる軒丸瓦、須恵器について記す。

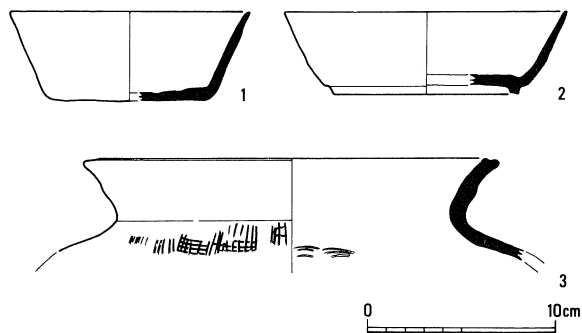
軒丸瓦1点が出土した。複弁蓮華文軒丸瓦である。大きな中房に1+8の蓮子を配し、二重の圈線で画された外区縁に凸鋸歯文をめぐらす。平城宮6225型式に属するものかと思われるが、全体に磨滅が著しく詳細は不明である。

須恵器には杯、甕がある。杯A(1)は平らな底部と斜め上方へのびる口縁部からなるもの。口径12.7cm、高さ5.8cmに復原できる。杯B(2)は杯Aに高台のつくもの。口径15.1cm、器高4.2cmに復原できる。甕A(3)は短く外反する口縁部をもつ。体部外面に平行線叩き目を施し、内面に同心円文の当板痕跡を残す。

※ 土器の器種名および調整については奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ～Ⅸ』に準拠した。



第 3 図 出土軒丸瓦 (1/4)



第 4 図 出土土器 (1/4)

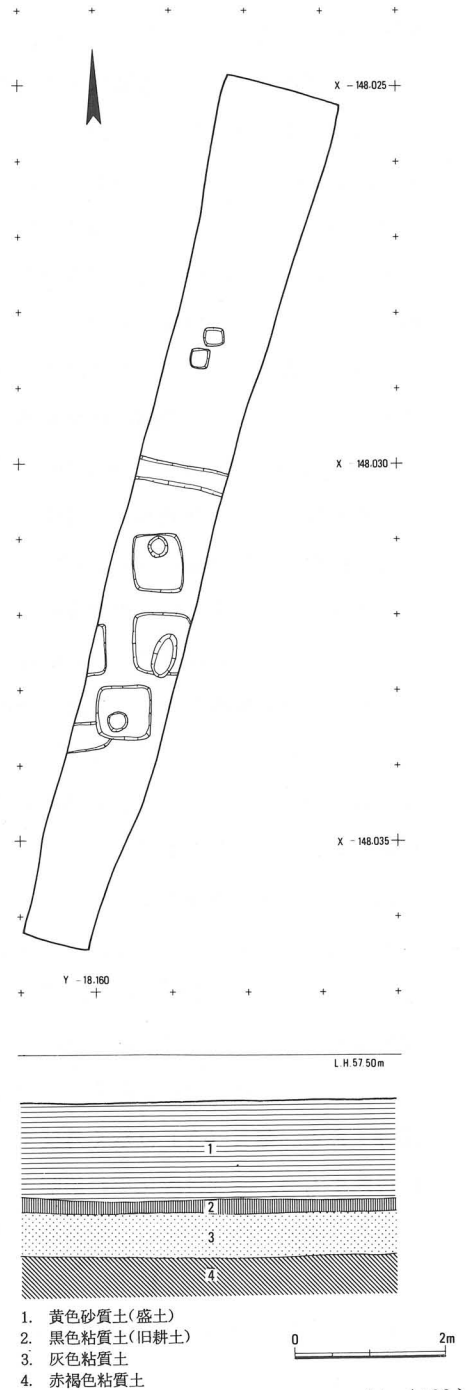
Ⅲ 平城京左京六条一坊十三坪の調査

1. 調査の契機と経過

昭和56年6月、奈良市八条町武田和則氏より、柏木町411-4・7番地における店舗付住宅の建設に伴う発掘届が提出された。当該地は、平城京左京六条一坊十三・十四坪の坪境にあたり、小路の存在が推定される位置である。奈良県教育委員会、奈良国立文化財研究所、奈良市教育委員会の三者の協議の結果、盛土されているため、建設による遺構への影響は考えられないが、条坊遺構の確認の必要上発掘調査を実施することが決定された。発掘調査は、昭和56年11月11日に開始し、同月14日に終了した。

2. 調査の内容

先きのべたように、調査対象地は、すでに約1.3 mの厚さに盛土され整地されていた。このため、隣接地との関係や、調査中の安全確保のため、発掘区の位置や調査面積に制約を加えねばならず、南北方向に近くトレンチ（幅1.5 m、長さ11 m）を設定した。発掘区での土層の堆積状況は、盛土の下、黒色粘質土（旧耕土）、灰色粘質土があり、遺構面である赤褐色粘質土に至る。赤褐色粘質土層上面は、後世の攪乱も受けておらず、遺構面として遺存状況は良好であった。しかしながら、検出した遺構は溝1条、柱穴4箇所等であり、条坊に関連する遺構は検出できなかった。測量の成果によって発掘区の位置を確認すると、小路は調査地の北端とその北側隣接地あたりに存在することが推定されたが、発掘区の制約から北側への拡張は困難であり、当初の目的であった条坊遺構の確認はこれを行うことはできなかった。なお、出土遺物は、柱穴掘形内より出土した土師器、須恵器が若干あるにすぎない。



第 5 図 発掘区堆積土層・検出遺構平面図

(1 / 100)

IV 平城京左京七条二坊十・十一坪の調査

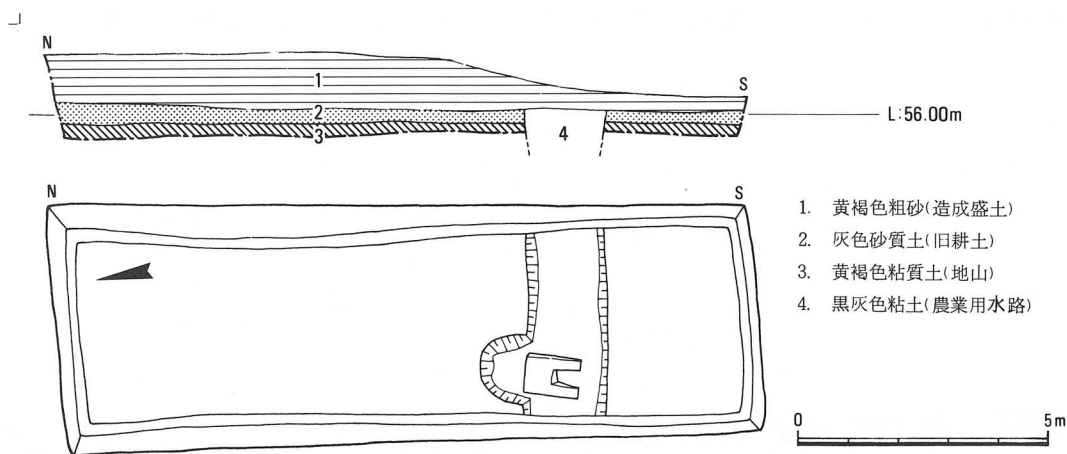
1. 調査の契機と経過

昭和56年8月17日、奈良市八条町731の2在住の武田越智雄氏より同市八条町蓮池725の1において駐車場建設計画のある旨、奈良市教育委員会文化財課へ届出があった。届出地は、平城京の条坊復原では左京七条二坊の十坪と十一坪との坪境にあたり、七条の条間路が想定される位置にあった。工事計画では直接地下の遺構に影響しないと判断されたが、市教育委員会では条坊遺構の重要性に鑑みて、県教育委員会文化財保存課および奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部と協議の上事前に条坊遺構確認のための発掘調査を実施することにした。調査は、昭和56年11月21日、東西5m・南北14m（面積70㎡）の発掘区を設定して開始し、その日程を終了したのは同年12月3日であった。

2. 調査の内容

調査地は、既に造成されており、地表から1.2mほどはこの折の盛土がある。これを除去すると本来の堆積土が現れるが、耕作土は造成時に排除されて残存せず、灰色砂質土の床土が厚さ20~40cmにわたって残された状態にある。その下層は黄褐色粘土の地山であり、遺構検出の作業はこれの上面において実施した。

調査の結果、発掘区南寄りを東西に走る農業用水路一条を確認したが、他には顕著な遺構の検出はなかった。この水路は調査地の造成の際に埋立てられたようで、中にはコンクリートの建設部材等の投棄がみられた。調査当初は、七条条間路の確認を目的としたわけであるが、これを裏付ける遺構・遺物の検出は何らなく、その目的を達するには至らなかった。



第 6 図 発掘区東壁堆積土層・平面図 (1/150)

V 平城京左京六条二坊十坪の調査

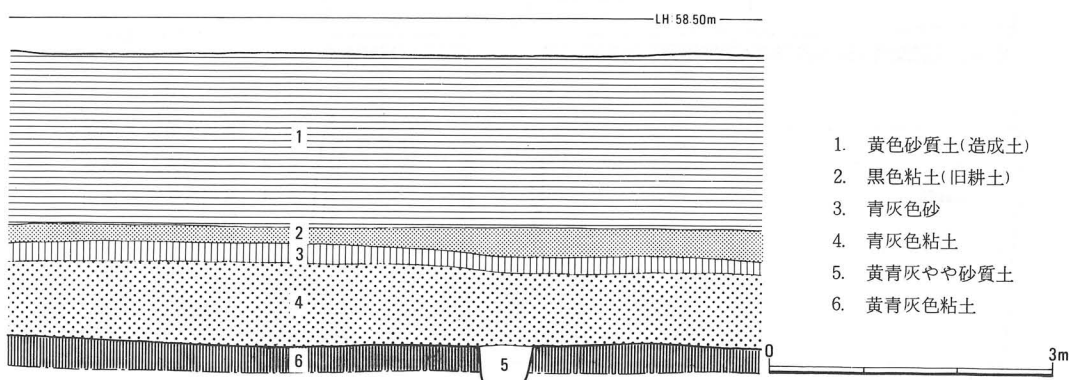
1 調査の契機と経過

奈良市では近年の急激な人口増加に伴い、下水処理施設の拡充を急務としている。今回、その一環として奈良市大安寺町281番地所在の奈良市衛生浄化センター管理棟及び処理施設の改築計画が提示された。計画地は、平城京の条坊復元では左京六条二坊十坪北東隅の一画に相当する。また、センターの性格上、処理用の大型機械を設置するため地下遺構を破壊する可能性が考えられた。そのため奈良市教育委員会では事前の発掘調査が必要であると判断し奈良県教育委員会、奈良国立文化財研究所との協議の上で、奈良市教育委員会文化財課が発掘調査を担当、実施することとした。

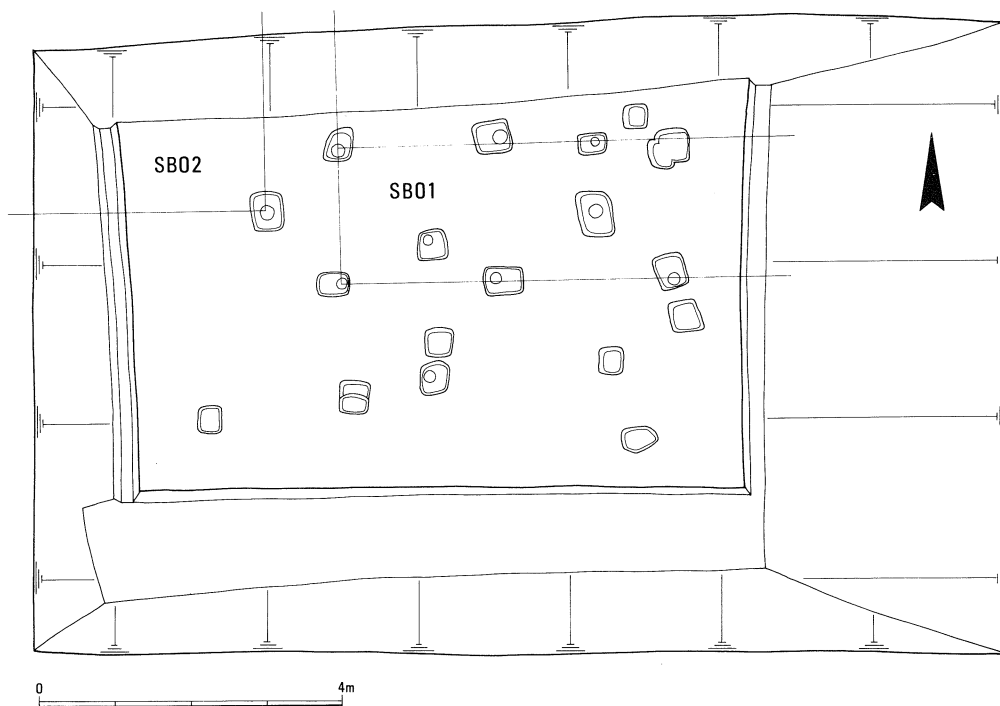
調査は市関係各課と調整の後、昭和56年8月25日に開始し、同年9月4日に現地での日程を終了した。当初、東西13.0m、南北8.5m（110.5㎡）の発掘区を設定したが、厚さ約2mの造成土、縦横に埋設されたパイプなどにはばまれ、実際に調査できた面積は40㎡にとどまった。

2 調査の内容

調査地は本来西を菰川、東を佐保川と南流する2条の河川に挟まれた低湿地であるが、現状では約2mの厚さの盛土がされており、標高はおおむね58.0m前後を示す。発掘区内の土層堆積状態は次のようなものであった。第1層黄色砂質土は造成土、第2層黒色粘土は旧耕土である。以下、第3層青灰色砂、第4層青灰色粘土と続く。青灰色粘土は少量の土師器、須恵器片を包含している。これらはいずれも菰川あるいは佐保川の氾濫によると思われる堆積である。遺構は第6層黄青灰色粘土層土面で検出した。第5層黄青灰色やや砂質土は柱穴の埋土である。柱穴の残存状況からみて遺構面である黄青灰色粘土層は上部を大幅に削平されているものと考えられる。佐保川流域の調査で今回の発掘区に比較的近い例として左京五条二坊十四坪^{注1)}の調査と十三坪^{注2)}の調査があるが、いずれも奈良時代以降に佐保川の氾濫を受け遺構面が大きく削平されていることがわかっている。



第 7 図 発掘区南壁堆積土層図 (1/80)



第 8 図 検出遺構平面図 (1/100)

今回の調査で検出した遺構は掘立柱建物 2 棟である。出土遺物は遺物包含層、柱穴中から奈良時代のもと思われる少量の土師器、須恵器片が出土したが、図示できるものはなく今回は記述の対象としない。

建物 SB01 は発掘区北半で検出した桁行 2 間 (4.4m) 以上、梁行 2 間以上の東西棟。南面に庇 (1.8m) を持つ。柱間は、桁行が西から 7 尺—7.5 尺と不揃いで、庇の出は 6 尺である。

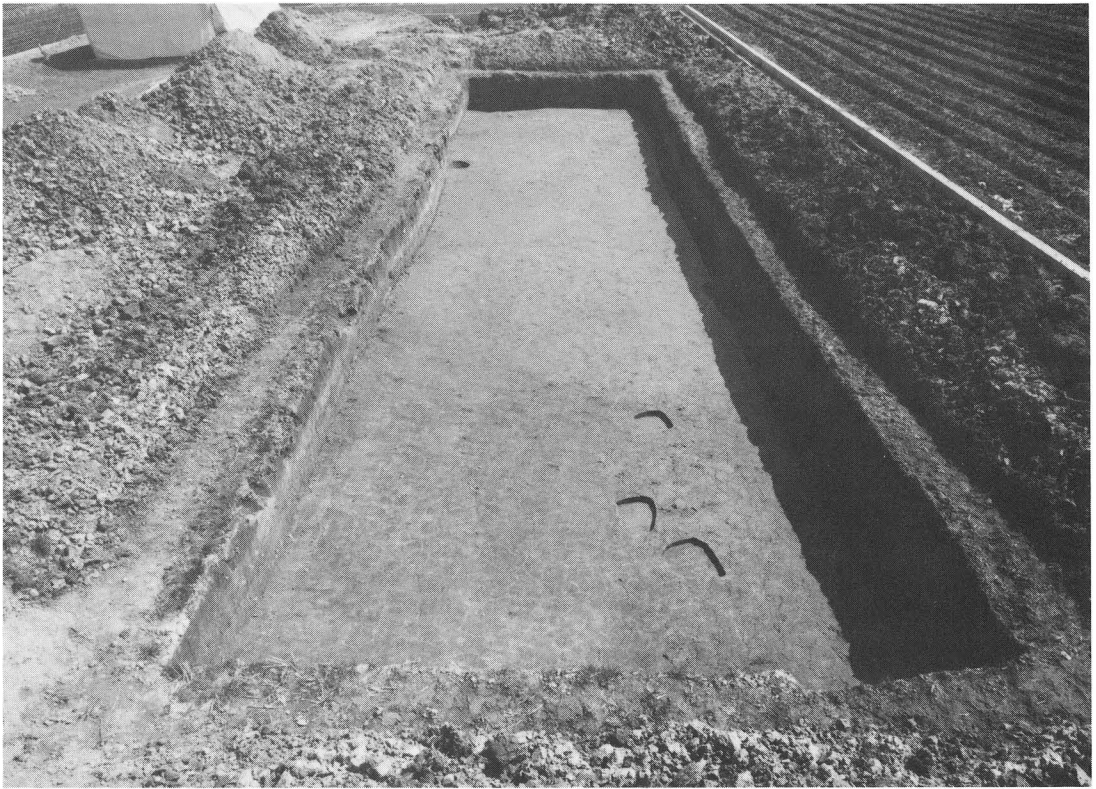
建物 SB02 は発掘区中央で検出した桁行 1 間 (2.25m) 以上、梁行 1 間 (2.1m) 以上の東西棟。柱間は桁行が 7.5 尺、梁行が 7 尺である。上記の SB01 とともに廃絶後の削平が著しく、柱穴は深さ 0.2~0.3m が残存するのみである。柱穴の重複関係がなく、同一面で検出した遺構であるため時期的な前後関係は不明である。

建物 2 棟はいずれも奈良時代のもと考えが、発掘区が小範囲であったため全体を把握するまでには致らなかった。また、当初調査地内に十坪の北、東を限る施設が存在する可能性も想定していたが、今回の調査では直接条坊に関する遺構は検出できなかった。

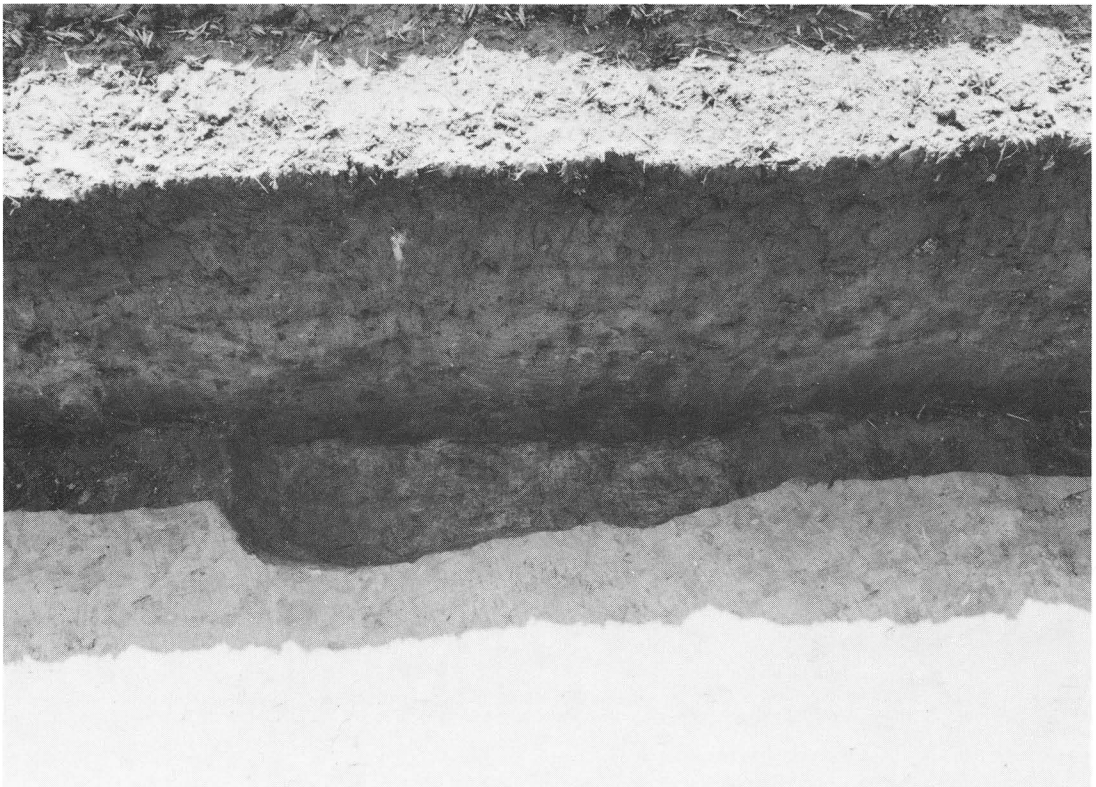
注 1) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和54年度 1980

注 2) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度 1981





1. 発掘区全景（西から）



2. 土壌SK01（北から）

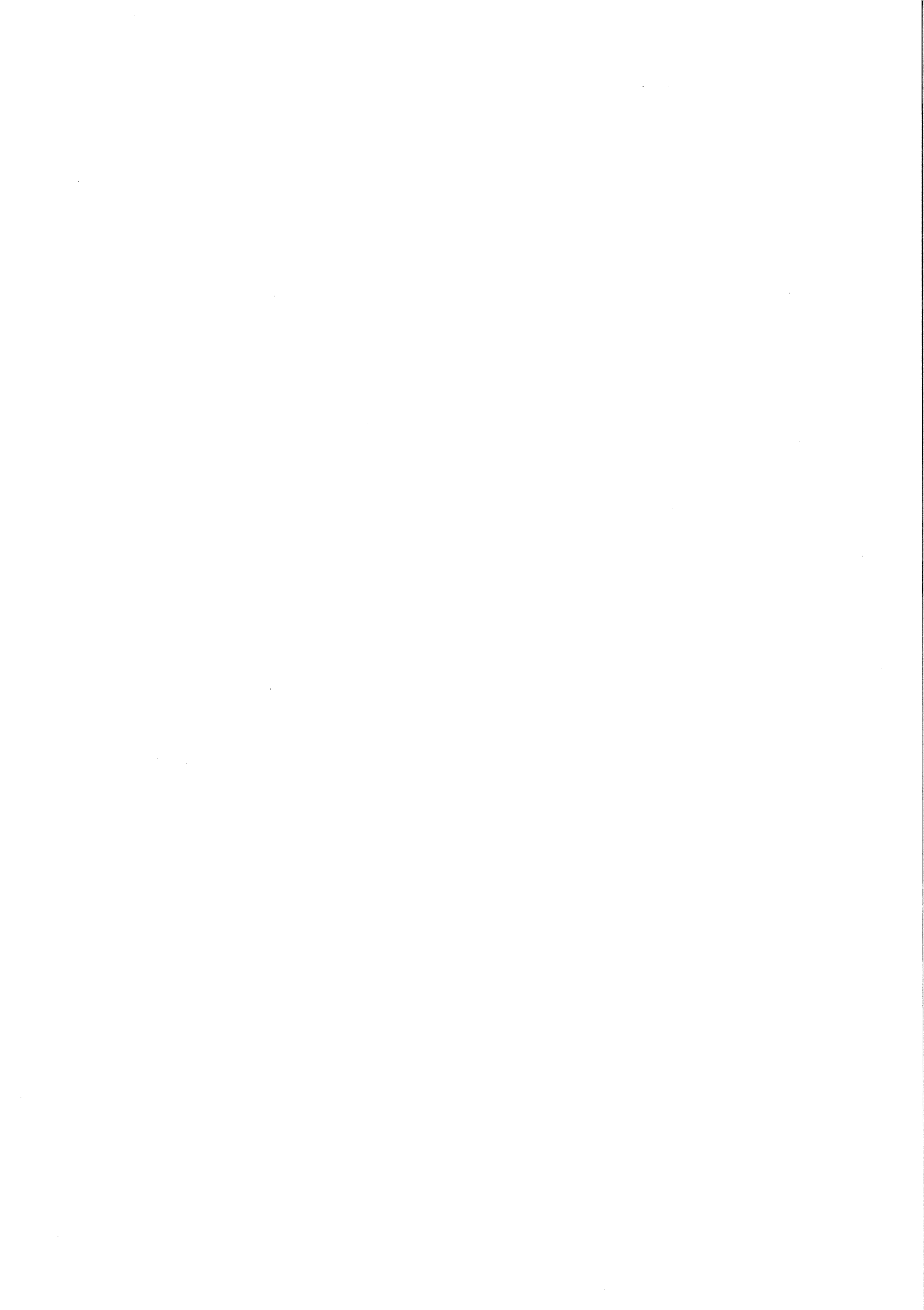




1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）





1. 発掘区全景（南から）

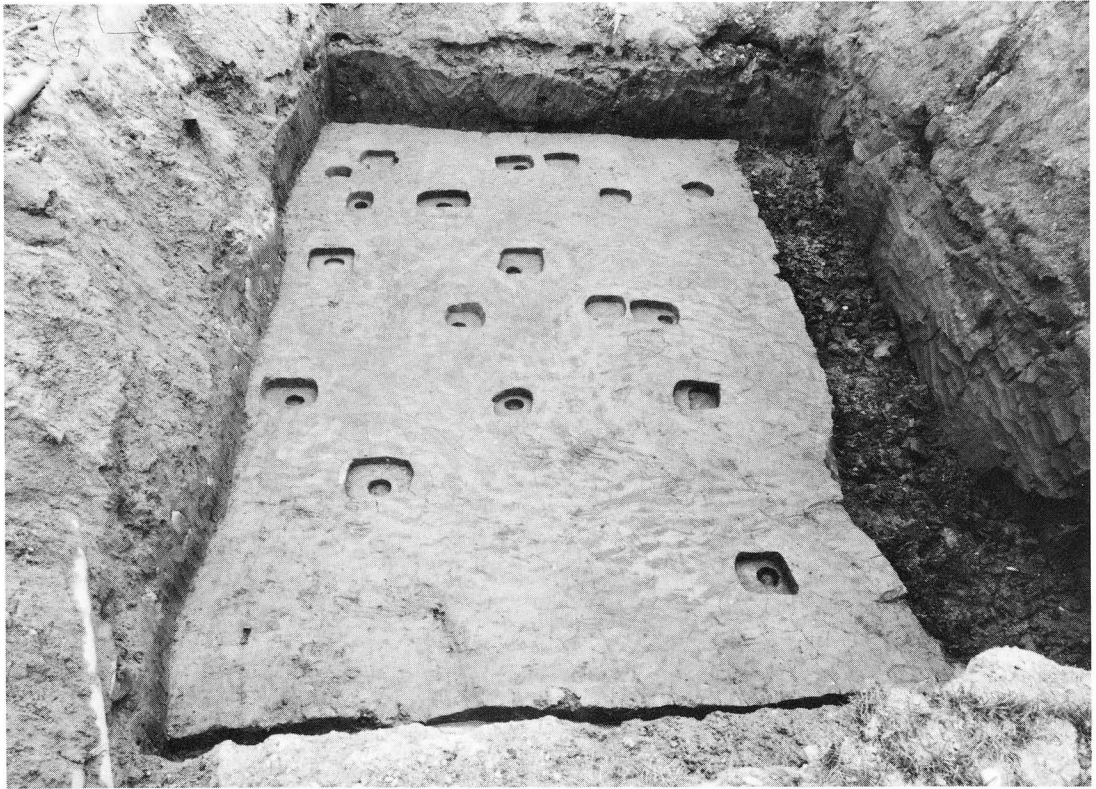


2. 発掘区全景（北から）





1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（西から）



平 城 宮 北 辺 地 域

発掘調査報告

例 言

1. 本書は奈良市佐紀町2859番地他において行った、道路改良工事に伴う事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は昭和57年3月16日から同年3月31日まで実施した。
1. 発掘調査は奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、西崎卓哉が現地を担当した。
なお、調査補助員として行天優貴子、谷沢 仁、西田辰博の各君の協力を得た。
1. 本書の執筆、編集は西崎卓哉が行った。

目 次

I はじめに.....	219
II 調査の内容.....	220

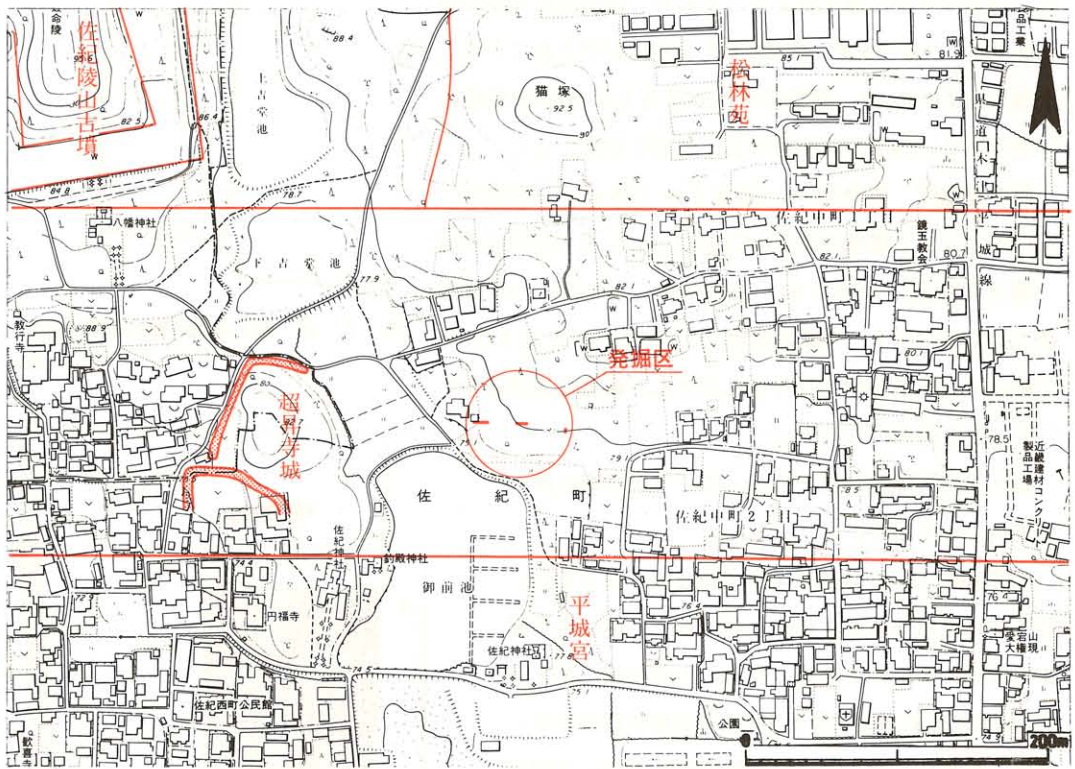
I はじめに

今回の調査は、奈良市が市内佐紀町2859番地他において計画した道路改良工事の事前発掘調査として実施したものである。調査は昭和57年3月16日に開始し、同年3月31日に現地での日程を終え機材を撤収した。発掘区は既設道路にそって3箇所を設定した。調査面積は計57㎡である。

調査地は奈良市の北方に広がる奈良山丘陵の一画に含まれ、付近は起伏に富んだ地形を呈している。標高は79.0m前後である。北方には佐紀盾列古墳群が分布し、南方には平城宮跡が広がる。近年、宮の北方一帯を松林苑だとする説が提示され、発掘調査による検証が序々になされているが、今回の調査地は宮と松林苑とのほぼ中間地点にあたる。また、この地は大蔵省の倉庫群の存在が推定されている地域でもある。遷都後平安時代には、御前池北側に超昇寺が創建されたと伝えられるが、明らかにはなっていない。さらに西方には、超昇寺氏の城館とされる超昇寺城が、その痕跡を留めている。

注1) 河上邦彦「松林苑の確認と調査」『奈良県観光』277号 1979

注2) 岸俊男「松林苑と年中行事」『遺跡・遺物と古代史学』1980



第 1 図 発掘区の位置と周辺の地形 (1/5000)

II 調査の内容

1. 検出遺構

既設道路にそって3箇所の発掘区を設定した。西から第1、2、3発掘区とし、以下各発掘区ごとに記述する。

第1発掘区 東西12m、南北2m (24㎡) の発掘区。発掘区内の基本層位は次のようなものである。表土以下黄茶色粘質土、暗茶色粘質土、黄色粘質土と続き、約1.0mで地山である赤黄色粘質土に達する。この発掘区では古墳、土壙を検出した。発掘区中央から南に向う約0.45mの高まりがある。この高まりの裾部平面は孤状を呈し、高まり上で直立する円筒埴輪を検出したことから、円墳あるいは前方後円墳の後円部裾に相当すると考えられる。先に述べた基本層位のうち淡茶色粘質土は墳丘の盛土である。現状では、付近は平坦な雑木林となっており、地表面に古墳の痕跡を見ることはできず、裾部を残し完全に削平されている。土壙は深さ約0.3m、発掘区外へのびるため全体の規模は不明である。内部から中世の瓦、土器片が出土した。

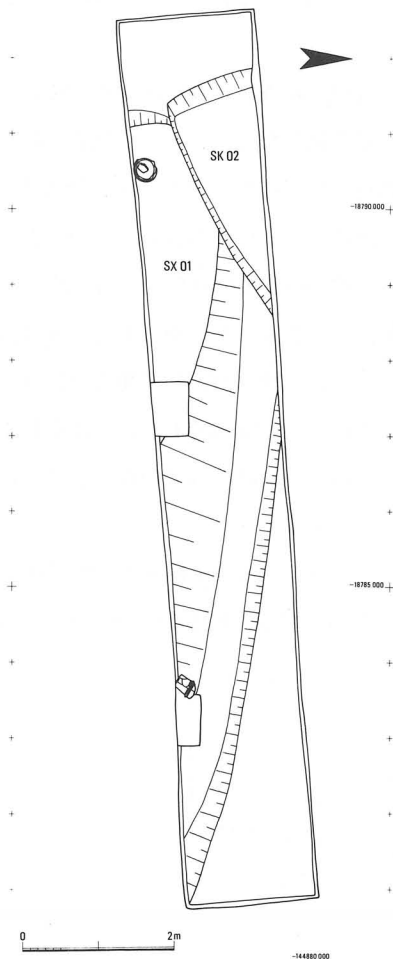
第2発掘区 東西6.5m、南北4m (26㎡) の発掘区。東西にのびる土塁状の高まりを検出したが、その性格は不明。

第3発掘区 東西2m、南北3.5m (7.0㎡) の発掘区。表土以下黄白色土、茶褐色粘質土、黄茶色土と続き0.9mで地山である黄色礫まじり土に達する。顕著な遺構はない。

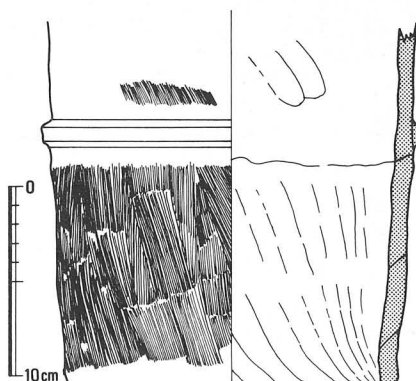
2. 出土遺物

瓦・土器・埴輪が出土した。ここでは古墳に伴う埴輪について記す。

円筒埴輪である。底部から第2段までが出土した。第1段外面は全体にタテハケが見られ、第2段下部にも若干のタテハケが施される。内面には、第1回目の乾燥単位に全面に指ナデによる調整が施される。断面の観察から第1回目の乾燥単位はさらに3回の粘土紐積み上げの単位にわけることができる。



第2図 第1発掘区検出遺構平面図
(1/100)



第3図 出土遺物 (1/4)



1. 第1発掘区全景（西から）

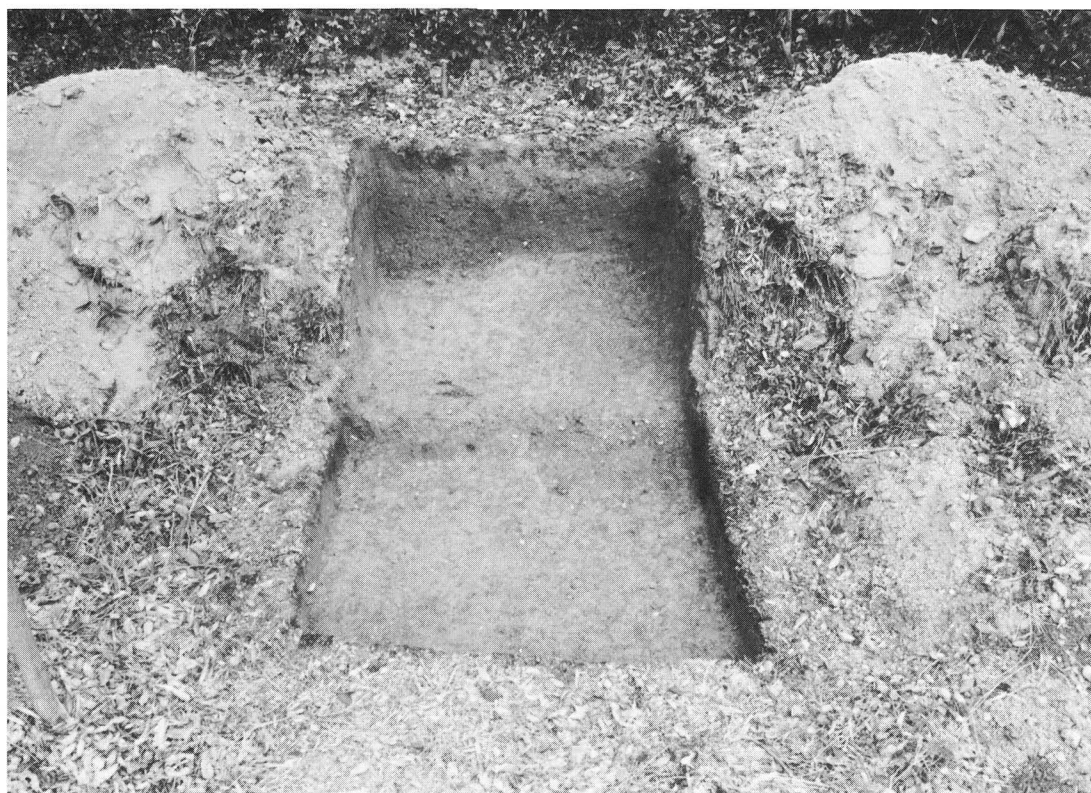


2. 遺物出土状況（北から）





1. 第 2 発掘区全景 (東から)



2. 第 3 発掘区全景 (南から)



京 北 条 里 推 定 地

発掘調査報告

例 言

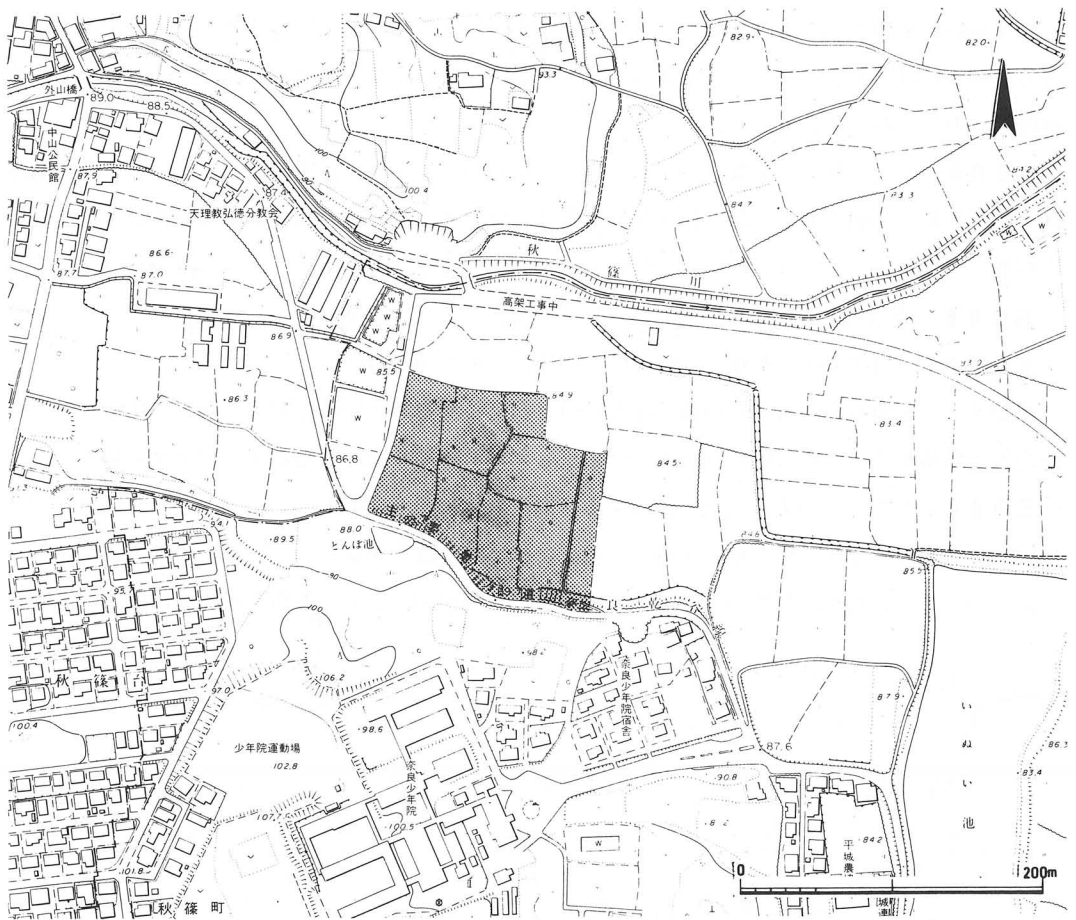
1. 本書は、奈良市秋篠町1333番地において実施した、奈良市立平城中学校（調査当時仮称第14中学校）新設に伴う事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年3月16日から同年4月27日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財室（昭和56年4月1日より文化財課）が行ない、中井 公が現地調査を担当した。
1. 発掘調査にあたっては、調査補助員として、谷沢 仁、藤田忠弘、奈良美穂、千代田秋允、鄭喜斗、長沢豊文、橋本雅裕（以上奈良大学文学部在学学生）の参加があった。
1. 本書の執筆ならびに編集は、中井 公が行なった。

目 次

I	はじめに	227
II	検出遺構	228
III	出土遺物	230

I はじめに

奈良市は、平城地域一帯の校区生徒数の急激な増加に対処すべく、昭和56年度事業の一環として翌昭和57年春の開校を目標に、秋篠町1333番地に仮称第14中学校（現平城中学校）の建設を計画した。同校建設予定地は、平城京の右京北方に広がるいわゆる京北条里推定地内に位置し、しかも事業計画が敷地面積19,172㎡におよぶ大規模なものであったために、奈良市教育委員会では、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部及び県教育委員会文化財保存課と協議の上、事前の発掘調査を実施することとした。調査にあたっては、校舎、体育館及びプールの建設予定箇所に、幅4mで総延長215mの発掘区を設定し、遺構の検出状況等に応じ漸次発掘区の拡張を行なった。発掘総面積は1134㎡である。調査は昭和56年3月16日に着手し、その全日程を終了したのは同年4月27日であった。



第 1 図 発掘調査位置図 (1/5000)

Ⅱ 検 出 遺 構

今回の調査で検出した主要な遺構は、素掘りの溝9条、土擴1であり、この他に自然流路1条がある。以下、それぞれについて説明を加えたい。

SD01 東西方向の素掘りの溝。幅30～40cmで、深さ10cm内外を測る。堆土には暗褐色土が堆積する。遺物の出土がなく、時期についてはこれを決し難い。

SD02 東西方向の素掘りの溝。幅70～90cmで、深さ30cm内外を測る。埋土には暗灰色土が堆積する。遺物の出土が無く、時期についてはこれを決し難い。

SD03 東西方向の素掘りの溝。幅40～50cmで、深さ20cm内外を測る。埋土には黒色土が堆積する。遺物の出土が無く、時期についてはこれを決し難い。

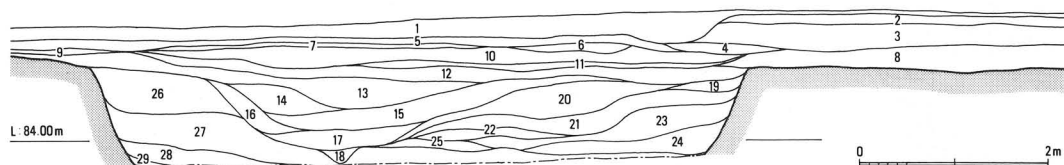
SD04 直角に折れてL字状の平面形を成す素掘りの溝で、南北方向に伸びる部分は約8.0mで完結するが、東西方向に伸びる部分は更に発掘区外西方へ続く。幅1.2～1.4mで、深さ60cm内外を測る。埋土には黒灰色の粘土が堆積する。丸・平瓦片、瓦器片など遺物若干の出土があり、その廃絶時期は中世であろうことがうかがえる。

SD05 平面不整形の土擴。東西の広がりには約10mに及ぶが、南北の広がりについては発掘区外へ続くために不明である。深さ10～20cmを測り、埋土には黒灰色の砂質土が堆積する。遺物の出土が無く、時期についてはこれを決し難い。

SD06 東西方向の素掘りの溝。幅20～30cmで、深さ15cm内外を測る。埋土には黒灰色の砂質土が堆積する。遺物の出土が無く、時期についてはこれを決し難い。

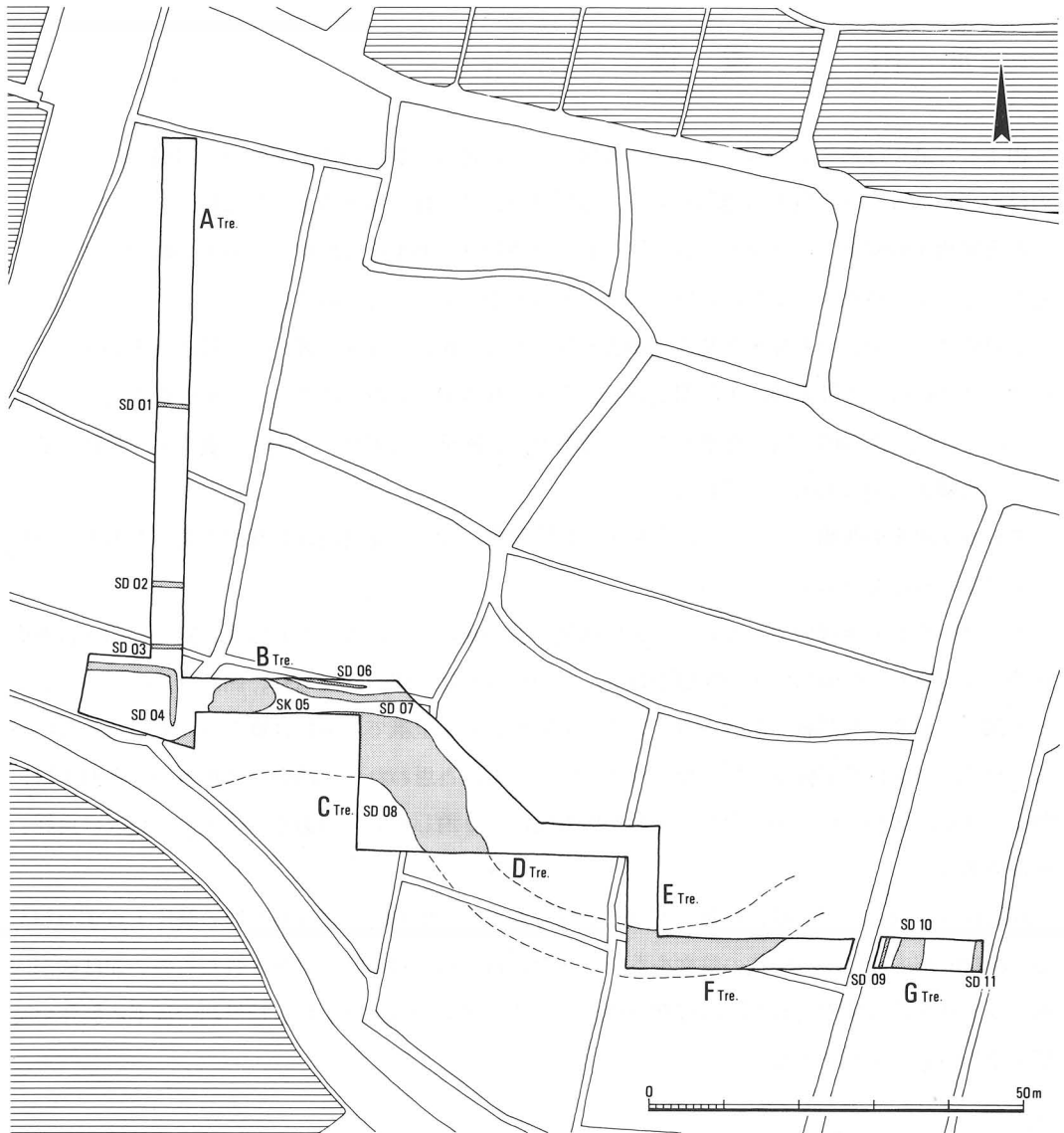
SD07 東西方向の素掘りの溝。幅1.0～1.8cmで、深さ30～40cmを測る。埋土には暗灰褐色の砂質土が堆積する。土器の細片がわずかに出土したが、時期を決定し得るまでには至らない。

SD08 北西から南東に向けて蛇行する自然流路。幅6.0～9.0mを有し、深さ90～140cmを測る。埋土は灰色系の砂及び砂礫が重層を成し、底部には自然木数片が遺存していた。出土遺物が無く、時期についてはこれを決し難い。なお、本流路は、現地地形からみて、谷筋を秋篠川に向かって流入



1 黒色腐蝕土	7 茶褐色質土	13 灰 色 砂	19 黄灰色砂質土	25 緑 灰 色 砂
2 暗 褐 色 土	8 暗灰色粘質土	14 黄 灰 色 砂	20 灰白色砂質土	26 灰 色 砂
3 茶褐色砂質土	9 赤褐色粘砂土	15 淡青灰色砂質土	21 黒灰色砂質土	27 黒灰色砂質土
4 黒 色 土	10 黄褐色粘土	16 灰 色 砂 質 土	22 淡 灰 色 粗 砂	28 緑灰色砂質土
5 暗褐色粘質土	11 黒 灰 色 砂	17 淡 灰 色 砂 礫	23 灰 白 色 砂	29 黒 色 砂 礫
6 茶 褐 色 土	12 白 灰 色 砂	18 黒 灰 色 砂 礫	24 緑 灰 色 砂	

第 2 図 Dトレンチ南壁 (SD08) 堆積土層図 (1/80)



第 3 図 検出遺構配置図 (1 / 1000)

する一支流路であった公算が大きい。

SD 09 南北方向の素掘りの溝。幅30~35cmで、深さ10cm内外を測る。埋土には暗灰色土が堆積する。遺物の出土が無く、時期についてはこれを決し難い。

SD 10 南北方向の素掘りの溝。幅2.8~3.2mで、深さ10~20cmを測る。埋土には黒褐色の砂質土が堆積する。遺物の出土が無く、時期についてはこれを決し難い。

SD 11 南北方向の素掘りの溝。幅1.3~1.5mで、深さ25~30cmを測る。埋土は上下2層に大別され、上層には黒灰色の粘土が、下層には暗黒色の粘土が堆積する。わずかに土器片の出土をみたが、時期を決定し得るまでには至らない。

Ⅲ 出土遺物

出土した遺物は極めて少量である。そのほとんどは包含層からの出土遺物で、遺構に伴ったものはわずかにSD04出土の遺物が若干ある程度で、他にはみるべきものがない。

包含層出土の遺物 全発掘区を通じて出土した遺物は、通常広く使用される遺物収納箱にして2箱があり、奈良時代から中世にかけての瓦と土器の小片が大半を占める。

奈良時代の遺物には丸瓦・平瓦片と須恵器片があり、後者には杯と甕の2器種がみとめられる。中世の遺物には、土師器皿、土師器羽釜、瓦器椀、瓦器皿、瓦質土器甕などの小片がある。また数点ではあるが、中国龍泉窯系の製作になると思われる青磁椀が含まれ、「熙寧元寶」・「景德元寶」といった輸入青銅銭も出土している。

SD04出土の遺物 奈良時代の丸瓦・平瓦片数点に加え、鎌倉時代の瓦器片若干があり、一括して投棄されたもののようである。

丸瓦はいずれも玉縁のつくもので、製作は粘土板の巻付けによる。凸面は縦方向の縄叩き目を磨り消して調整し、凸面には布の圧痕が残る。円筒の分割は焼成の後であり、側面には内側から $\frac{2}{3}$ ほどの深さにおよぶ分割載面が残されている。暗灰色、焼成堅緻で、中には焼歪みのみられるものが含まれる。平瓦は凸型使用の粘土板一枚作りによるものと思われる。凸面には縦方向の縄叩き目、凹面には布の圧痕が残るが、中に布圧痕を横方向に磨り消したものがある。暗灰色で焼成は良好、堅緻である。

瓦器片はどれも小片で観察し難いものばかりであるが、比較的良好的な椀と皿の破片1点ずつがある。椀は底部内面に連続輪状の暗文をもち、外面に粗い横方向の磨きが施されたもの。皿は底部内面にジグザグ状の暗文をもち、口縁部は横ナデで仕上げている。いずれも12世紀の後半に製作の時期が求められるものであろう。

Ⅳ ま と め

今回の調査地は平城京北方のいわゆる京北条里推定地内にある。そのため調査の主目的は条里に懸わる手懸りを得ることにあつた。しかし、その結果は調査当初の目的を達するに至らなかったとする以外にない。通常、条里遺構の検証には、地下に遺存した場合の畦畔や素掘り溝などの遺構を依り所に、水田地割を復原する方法が採られている。ただ、常に耕作の繰り返される水田の性格上、特殊な条件なくしてはこうした遺構の遺存は望むべくもなく、また時期の割出しにも困難が伴う。条里に対して我々がいまだ確実な検証手段を持たずにいる現在、今回の調査結果が、また方法上の問題を抱えたものであることを痛感せずにはいられない。



1. Aトレンチ全景 (南から)



2. Bトレンチ全景 (東から)



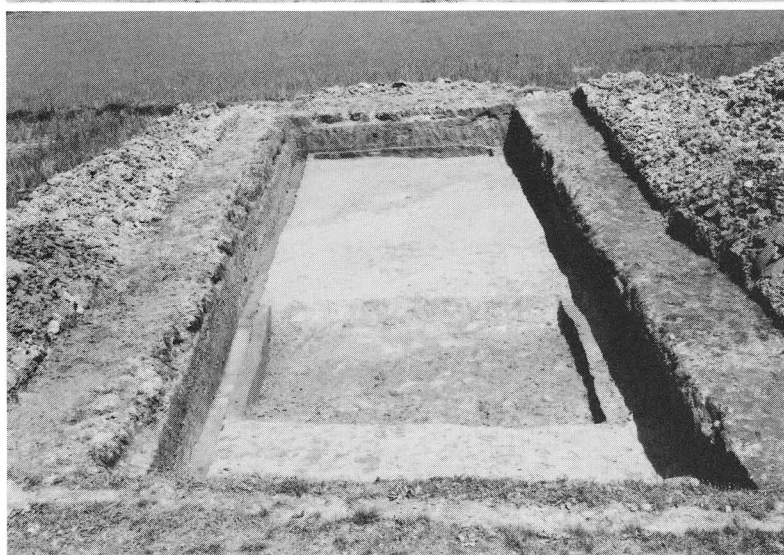
3. Dトレンチ全景 (東から)



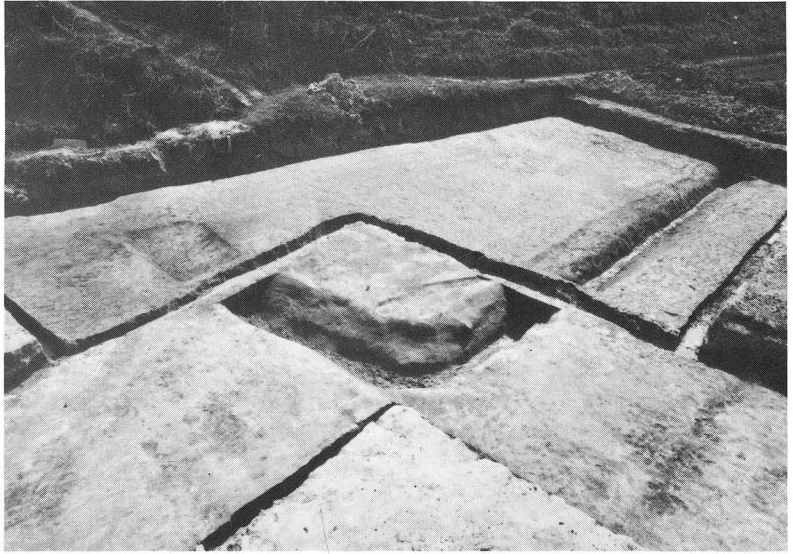
1. Eトレンチ全景 (南から)



2. Fトレンチ全景 (西から)



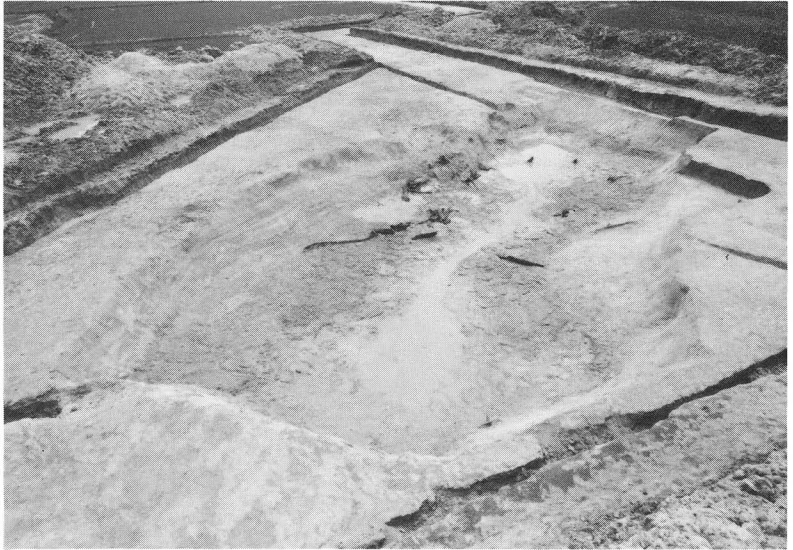
3. Gトレンチ全景 (西から)



1. S D04 (北東から)



2. S D08 (南東から)



3. S D08 (北南から)

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和56年度

昭和57年3月31日

編集
発行

奈良市教育委員会

奈良市三条大路南1丁目1-1

電話 0742(34)1111(代)

印刷

共同精版印刷株式会社

奈良市三条大路2丁目2番6号

奈良女子大学附属図書館